

修士論文（要旨）
2019年1月

デスカフェ参加者の死生観

- 死を意識することが人生観にどのように関係しているか -

指導 長田 久雄 教授

老年学研究科
老年学専攻
216J6010
萩原真由美

Master' s Thesis (Abstract)
January 2019

Views of Life and Death among Participants in a Death Café
: Is There an Association between Consciousness of Death and Attitude toward Life?

Mayumi Hagiwara
216J6010
Master' s Program in Gerontology
Graduate School of Gerontology
J.F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Hisao Osada

目次

第1章 研究の背景

- 1.1 高齢化率の上昇と死亡者数の増加・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 1.2 身近になった「死」と終活の台頭（死に方の準備を始めた現代人）・・・・・・ 3
- 1.3 死生学の変遷と死生観の空洞化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
- 1.4 死生観研究の現状・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

第2章 研究の目的

- 2.1 目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

第3章 研究1

- 3.1 研究方法：文献調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
- 3.2 結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
- 3.3 考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
- 3.4 結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32

第4章 デスカフェとは

- 4.1 始まりと現状・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
- 4.2 社会現象として・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33

第5章 研究2

- 5.1 研究方法：質的調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
- 5.2 結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
- 5.3 考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
- 5.4 結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41

第6章 総合考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43

第7章 本研究の限界と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44

謝辞

引用文献

- 資料 ①<文献調査> 対象文献レビュー（メモ）
- ②<質的調査> 逐語録コード化作業シート

第1章 研究の背景

我が国では高齢化率の上昇に伴い、死亡者数も年々増加している。厚生労働白書 2016年版によれば、年間死亡者数が167万人というピークを迎える2039年まで、毎年約1万5千人以上ずつ死亡者数が増えていく予想値が示されている。医療機関だけでは受け入れ不可能になることを見込み、地域包括ケアシステムの推進で「在宅看取り」の体制構築にも力が入れている。このような時代背景のもと、自分がどこでどんなふうに死にたいかを考えることも含めて、自らが死への準備をすすめる「終活」も盛んに行われるようになってきた。しかし人々の関心は、“死に方”や相続対策などの“死後の始末”が中心で、「死」までの「生」に向けた“自分なりの生き方”の模索が行われているのかどうかは未知である。死への準備教育を通して、『死を学ぶことは、生きることを学ぶこと』とデーケンが解き続けてきた死生学の基盤は、まだ現代人の心には希薄なのではないだろうか。

「死生観」という言葉があるように、「生と死」は切り離して考えられるものではないが、近年の老年学や死生学からの研究は、臨床死生学や終末期医療の視点から「死」前後の短いスパンに焦点をあてたものが多く、生と死を一体と捉え、死を意識することで培われる人生観や生き方の変化を実証している研究が少ないように思われる。QOD(Quolity of Death)の研究も行われるようになってきたが、その人らしい死の迎え方といった“死なせ方”の研究の手前に、長寿になったからこそ死ときちんと向き合いながら、最期まで自分の人生を自分でデザインし、主体的に生き抜くための道を探る研究が必要になってきているのではないだろうか。

第2章 研究の目的

本研究は、まず、死生観や死の態度をテーマにした研究の文献調査を行い、終末期支援に焦点を当てた「死なせ方の研究」に偏り過ぎていないどうか、死を意識することで培われる人生観や生き方の変化に目を向けている研究の有無を探る。

さらにより具体的に、「死」と向き合い、「死」を学ぶことが、生きるための知恵や人生観に実際にはどう反映されてゆくのかをインタビュー調査によって探る。対象は、死について語り合い、学ぶ場である「デスカフェ」の参加者とした。同じ場所で語り合っているとしても、生き方や思いは人それぞれのはずである。その多様な心のあり方の中から、文献調査の結果と合せて、死を意識してこそ生まれる生き方や死生観を探る探索的研究とする。

第3章 研究1

●研究方法：文献調査

<分析対象文献>

2017年2月21日15:15、「高齢者」and「死生観 or 死の態度」をキーワードに医中誌Webにおいて国内論文を検索し、原著論文から、①研究対象者が国内で日常生活を送っている高齢者自身である、②研究目的に高齢者の死生観を探ることにつながる言及がされている、③質的・量的実証研究である、論文に絞って、紀要と報告書を除くと94件の文献が残った。この94件を主題別に分類し、研究室の同輩や博士課程研究者の協力を得て、高齢

者が自分事として「死」を捉え、今後の生き方を見据えている可能性のある分類の文献を抽出した結果、55 件の文献が対象となった。対象文献について、「目的」「対象」「研究方法」「明らかにされた結果」を整理し、研究視点と「明らかにされた結果」の中に、死を意識することで、より主体的に生きぬくための示唆が含まれているかどうかを調査した。

<結果>

55 件の文献に、「死を意識することが生きる力につながる」ということを主題にした研究はゼロであったが、考察で示唆している文献は 2 件あった。「死を意識する」とことと「生きる力」の関連に目を向けてはいないが、高齢者がこれからの人生にどんな思いを育て、どんな生き方をしようとしているのかに触れている文献は 9 件あった。合わせて 11 件であり、死生観や死の態度を主題にした研究の 4/5 が「死」にのみ焦点を合わせ、「生」に目を向けていなかった。

文献数は 55 件中 11 件と少ないが、得られた記述内容を意味合いの似ているものをまとめてコード化し、概念化してみると、今回の文献調査から、高齢者が最期まで主体的に生きるために抱いている人生観や死生観の構成概念として、4 つのコア・カテゴリーが得られた。『自分事としてのメメント・モリ』『マイ・ウェイ』『信頼』『超越』である。人とのつながりを大切にしながら（信頼）、人と比べず（超越）、死までの生をより自分らしく（マイ・ウェイ）主体的に過ごそうとする思いの始まりには、まず「死」を自分事として意識すること（自分事のメメント・モリ）があった。

しかし、今回の調査結果からは、死を意識することがその後の生き方にどのように影響するのかについて、具体的につかむことはできなかった。そこで、次の研究 2 でより具体的な関係をみる質的調査を行うこととする。

第 4 章 デスカフェとは

研究 2 の質的インタビューの対象者は、近年我が国でも開催が増えているデスカフェの参加者である。デスカフェとは、言葉の通りお茶やコーヒーを飲みながら「死」について語り合う場で、1999 年スイスのある村で行なわれたカフェ・モーテルが始まりである。2011 年にイギリスの社会起業家が英語版にしてロンドンで開催し、Web 上で誰でもできるように開催ガイドラインを掲載したことから、急速に世界に広まった。わずか 7 年後の 2018 年 7 月現在で世界 56 カ国、延べ 6,000 回以上開催され、一つの社会現象になっている。

第 5 章 研究 2

●研究方法：質的調査

<調査対象>

2017 年 9 月から毎月定期的に開催している国内唯一のデスカフェに参加する 50～70 歳代 7 人（男性 2、女性 5 名）の協力を得た。

<調査方法>

主催者の承認を得た上で面談を依頼し、同意を得た7人に、①デスカフェに参加した動機やきっかけ、②参加してよかったこと、③死への思いや考え方に変わったことがあるか、気づいたことがあるか、④生と死はどんな関係だと思うか、⑤それが今後の人生や生き方にどう影響しているか、の5つの視点によるインタビューガイドをもとに、1人約30分～1時間の半構造化面接を行なった。

<倫理的配慮>

桜美林大学研究倫理委員会の承認を得ている（2017.9.21 承認番号17019）。

<分析方法>

生データを逐語化し、質的記述的内容分析法により文脈から「死を意識し、学ぶことで、人生観や死生観にどのような変化が生まれているか」「最期まで主体的に生き抜くために、どんなことを思っているか」について語っていると思われる描写を抽出し、共通意味を持つものを集めてコード化し、概念化した。

<結果>

作成した逐語録から70のコードが得られ、18のサブ・カテゴリー、12のカテゴリー、4のコア・カテゴリーが抽出された。コア・カテゴリーは『自分事のメメント・モリ』『学びと承認』『潔さ』『つながりと感謝』で、ある人の親の死の様子などを生の声で聞きながら積み重なっていく「生と死」や「人生」への思いには、“他人事ではない”という現実感を伴う気持ちが内包されていた。「ピンピンコロリで逝きたいなんて思っていたけれど、そう簡単に死ねないこともよくわかった」という学びから、「生き方は選べるけど、死に方は選べないから後悔しない生き方をしたい」「人は死んでも誰かの心の中でつながっている」など、生きる意味が意識された結果のコア・カテゴリーになった。

<考察と結論>

文献調査から得たコア・カテゴリーと質的調査から得たコア・カテゴリーはどちらも4つで言葉の響きも似ているイメージがある。しかし、一つひとつ比べて考察すると、デスカフェ参加者から聞き取った構成概念には、より切実で、死ぬ覚悟ではなく“生きる覚悟と”いうものが見え隠れしている。しかも、煩惱にあふれる現実と折り合いながら、語り合いの積み重ねでじわじわと自分流に育てた覚悟なので、しなやかな強さをもっている。

つまり、主体的に、自発的に死を意識して語り合うことがよりしなやかに、より自分らしく最期まで生き抜く知恵と力につながるということが明らかになった。

主要参考文献

- 1) 内閣府：高齢化の状況. 平成 30 年版高齢社会白書（平成 29 年度高齢化の状況及び高齢社会対策の実施状況・平成 30 年度高齢社会対策）：2-4（2018）.
- 2) 厚生労働省：死亡の動向. 平成 28 年版厚生労働白書（平成 27 年厚生労働行政年次報告）-人口高齢化を乗り越える社会モデルを考える-：13-15（2016）
- 3) 熊田梨恵：年間 47 万人へ、看取りなき「その他死」が激増. 文藝春秋オピニオン 2015 の論点 100：158-160（2015）
- 4) 木村由香、安藤孝敏：エンディングノート作成にみる高齢者の「死の準備行動」. 応用老年学. 9（1）：43-54（2015）
- 5) エンディング産業展 2016 結果報告 www.ifcx.jp/（2018.12.1 取得）
- 6) 長崎雅子、松岡文子、山下一也：年代および性別による死生観の違い—非医療従事者を対象としたアンケート調査を通して—. 島根県看護短期大学紀要. 12：9-8（2006）
- 7) 島藺進：日本人の死生観を読む 明治武士道から「おくりびと」へ. 朝日選書：26（2012）
- 8) アルフォンス・デーケン：生と死の教育. 岩波書店：2-4（2001）
- 9) 柴田博：学際的な学問としての死生学. 医療と社会. 25：9-19（2015）
- 10) Elie Metchinikoff、（英訳）P. Chalmers Mitchell：The Nature of Man - Studies in Optimistic Philosophy, G.P.Putnam's sons New York London, 297-298（1903）
- 11) Kastenbaum R：Gerontology. In：The Encyclopedia of Aging, Maddox GF et al(eds), Springer Publishing Company, 1987, P288-290
- 12) G.L. マドックス編、エイジング大事典刊行委員会監訳：エイジング大事典 The Encyclopedia of Aging, 早稲田大学出版部 230-231、（1990）
- 13) Elie Metchinikoff、（訳）平野威馬雄：長寿の研究—楽観論者のエッセイ、幸書房、159（2006）、（原著）Elie Metchnikoff、:Essais Optimistes（1907）
- 14) エリザベス キューブラー・ロス、（訳）鈴木晶：死ぬ瞬間—死とその過程について、中公文庫（2001）
- 15) 島藺進・竹内整一（編）、死生学 [1] 死生学とは何か、1. 9-16、東京大学出版会（2008）
- 16) 山本詩織：A. デーケンによる死への準備教育に関する生涯学習的研究、現代社会文化研究 No.61 12 月、103-120（2015）
- 17) 広井良典：島藺進・竹内整一（編）、死生学 [1] 死生学とは何か. II.6.139 生と死の時間、東京大学出版会（2008）
- 18) 永田勝太郎：＜死にざま＞の医学. NHK ブックス. 231（2006）
- 19) アルフォンス・デーケン：新版 死とどう向き合うか. NHK 出版. 16（2011）
- 20) 山折哲雄：寿命百歳時代 日本人は死生観を復活させよ. 文藝春秋オピニオン 2015 の論点 100：20-23（2015）

- 21) 彦聖美、田島祐佳：高齢者が捉える生と死に関する文献検討. ホスピスケアと在宅ケア. 9 (1) : 42-49 (2011)
- 22) Hales S, Zimmermann C and Rodin G : The Quality of Dying and Death. Archives of Internal Medicine. 168(9) : 910-918 (2008)
- 23) Emily. A. M. Jarred V, L. P. Montross. T. et al : Defining a Good Death (Successful Dying) : Literature Review and a Call for Research and Public Dialog, Am J Geriatr Psychiatry 24;4, April 2016
- 24) Stewart AL, Teno J, Patrik DL et al : The Concept of Quality of Life of Dying Persons in the Context of Health Care. Journal of Pain and Symptom Management. 17: 93-108 (1999)
- 25) 野尻雅美：余生も楽しく美しく：高齢者の QOL（人生の質）と QOD（死の質）、マリオ企画出版（2015）
- 26) 島藺進・竹内整一（編）：死生学 [1] 死生学とは何か 1.24、東京大学出版会（2008）
- 27) 原谷珠美, 佐々木由紀子：サービス付き高齢者向け住宅入居者の終末にむけた準備性. 日本看護学会論文集 在宅看護, (46) : 11-14 (2016)
- 28) 荒木亜紀：向老期における人生の最終段階に向けた過ごし方の特徴. ホスピスケアと在宅ケア, 23(3) : 364-372 (2015)
- 29) 福武まゆみ, 岡田初恵, 太湯好子：高齢者夫婦の死に対する意識と準備状況に関する研究. 川崎医療福祉学会誌, 22(2) : 174-184 (2013)
- 30) 山本里美, 長谷川博亮, 結城佳子：高齢者の生活満足度とこれからの生活への準備性に関する研究. 地域と住民, (30) : 29-36 (2012)
- 31) 谷田恵美子：「死への準備」に対する認識 若者・中年・高齢者の比較. 看護・保健科学研究誌, 11(1) : 166-175 (2011)
- 32) 谷田恵美子, 遠藤明美, 安東由美子, 他：「死への準備」に対する認識 死を回避したい思いと死後の世界観の尊重. インターナショナル Nursing Care Research, 9(4) : 1-9 (2010)
- 33) 石井京子, 上原ます子：高齢者の死の準備状態に関する研究—5年間の経時的変化から—, ヒューマン・ケア研究 2002 ; (3) : 1-10
- 34) 吉田浩二, 相田一郎, 望月吉勝, 他：健康な老人に対する死への準備教育. 日本公衆衛生雑誌, 39(6) : 355-360 (1992)
- 35) 井藤美由紀：「生と死の教育」を考える 生活に根ざした伝統的生死観から. ホスピスケアと在宅ケア, 16(1) : 29-38 (2008)
- 36) 岡本宣雄：高齢者が生活上経験するスピリチュアルなテーマに関する研究；生きる意味に焦点をあてた質的研究. 川崎医療福祉学会誌, 25(1) : 37-47 (2015)
- 37) 生田奈美可：配偶者を亡くした高齢遺族のスピリチュアリティに関する質的研究. 日本看

- 護研究学会雑誌, 34(2) : 97-107(2011)
- 38) 竹田恵子, 太湯好子, 桐野匡史, 他 : 高齢者のスピリチュアリティの特徴. 日本看護学会論文集 老年看護, (40) : 96-98(2010)
 - 39) 川島大輔 : 宗教を通じた死生の意味構成 ある女性高齢者のライフストーリーへの事例検討. 人間性心理学研究, 26(1-2) : 41-52(2009)
 - 40) 竹田恵子, 太湯好子 : 日本人高齢者のスピリチュアリティ概念構造の検討. 川崎医療福祉学会誌, 16(1) : 53-66(2006)
 - 41) 小楠範子 : 傾聴によって表出された語り 頭痛の裏に隠されたある高齢者のスピリチュアルペイン. ホスピスケアと在宅ケア, 13(3) : 258-263(2005)
 - 42) 鶴若麻理, 岡安大仁 : リビングウィルへのスピリチュアリティの関連性の検討. 臨床死生学, 9(1) : 9-16(2004)
 - 43) 石井八恵子, 片岡智子 : 文献からみるスピリチュアリティへの関心の高まり. ホスピスケアと在宅ケア, 11(3) : 288-297(2003)
 - 44) Nakagi Satomi, Tada Toshiko : 日本の高齢者における自我同一性と死への態度との関連性 (Relationship between identity and attitude toward death in Japanese senior citizens). The Journal of Medical Investigation, 61(1-2) : 103-117(2014)
 - 45) 中村昭美 : 病を抱えながら生きる高齢者の思い 滋賀県高島市の一高齢者の事例から. グリーフケア, 2 : 117-134(2014)
 - 46) 川本智映子, 岡本祐子 : 重要な他者との関係性からみる高齢者の死のイメージ. 広島大学心理学研究, (12) : 235-248(2013)
 - 47) 水島恵一 : 人間観・死生観の研究 イメージを中心に. 人間性心理学研究, 29(2) : 157-168(2012)
 - 48) 中木里実 : 高齢者の死への態度に影響を与える要因. 臨床死生学, 16(1) : 67-78(2011)
 - 49) 荒木亜紀 : 福祉の現場から 地域で暮らす人々の先行きに対する思いと過ごし方. 地域ケアリング, 18(9) : 56-59(2016)
 - 50) 工藤晶子, 牛尾禮子, 森崎直子 : 在宅要介護高齢者の人生の最期を迎えたい場所の希望と自尊感情. 日本看護学会論文集 慢性期看護, (46) : 154-157(2016)
 - 51) 沖中由美 : 在宅で老いを生きる要介護高齢者の自己意識. 日本看護研究学会雑誌, 34(2) : 119-129(2011)
 - 52) 中川威, 増井幸恵, 呉田陽一, 他 : 超高齢者の語りにみる生(life)の意味. 老年社会科学, 32(4) : 422-433(2011)
 - 53) 石坂昌子 : 死の意味づけと自我同一性の関連. 健康支援, 11(2) : 17-26(2009)
 - 54) 笠原浩一郎 : 通所リハビリテーション(デイケア)利用中の在宅高齢者の死生観について. 群馬医学, (87) : 31-39(2008)
 - 55) 小谷みどり : 中高年の死観 自己と大切な人の死観の比較. 日本家政学会誌, 59(5) :

287-294(2008)

- 56) 酒井陽子：入院した高齢患者の自らの生(死)に対するイメージの実態；事前に自分の生き方を自己決定できるための支援のあり方．国立病院看護研究学会誌，4(1)：20-24(2008)
- 57) 鹿村眞理子，高橋ゆかり，柴田和恵：中高年の死に対する態度 性、年齢、職業による違い．日本看護学会論文集 看護総合，(38)：172-174(2007)
- 58) 小谷みどり：死の恐れ背景にある意識．ホスピスケアと在宅ケア，13(3)：233-237(2005)
- 59) 勝間政男，犬浦久美子，市川範子，他：アンケートから見た利用者の死生観．東京都老年学会誌，9：61-63(2002)
- 60) 田中愛子：共分散構造モデルを用いた老年期と青・壮年期の「死に関する意識」の比較研究．山口医学，50(6)：801-811(2001)
- 61) 伊藤孝治，金崎悦子：地域比較による老人の死生観の研究．愛知県立看護短期大学雑誌，(24)：25-32(1992)
- 62) 橋本篤孝，中村公美，柳井美香，他：「死」に対する態度は加齢とともにどうか変わっていくか．老年精神医学雑誌，4(1)：51-58(1993)
- 63) 伊藤孝治，永崎和美，一柳美稚子：老人の死生観の傾向．愛知県立看護短期大学雑誌，(23)：101-111(1991)
- 64) 花岡秀明，西村良二，新宮尚人，他：高齢者の回想量とその関連要因について．作業療法，22(3)：235-242(2003)
- 65) 花岡秀明，西村良二，新宮尚人，他：高齢者への回想法の有効性に関する予備的検討．作業療法ジャーナル，37(1)：81-86(2003)
- 66) 羽鳥香奈，内田陽子：否定的回想をする高齢者への再評価を高めるライフレビューの方法．臨床看護，31(14)：2238-2244(2005)
- 67) 山本由子：高齢者における Life Review の概念分析．老年看護学，18(2)：85-94(2014)
- 68) 川島大輔：老年期にある浄土真宗僧侶のライフストーリーにみる死の意味づけ．質的心理学研究，(7)：157-180(2008)
- 69) 中村もとゑ，森川千鶴子：ひとり暮らしの女性要支援高齢者が他者と交流することの意味．老年看護学，18(2)：76-84(2014)
- 70) 岩崎美香：臨死体験による一人称の死生観の変容 日本人の臨死体験事例から．トランスパーソナル心理学/精神医学，13(1)：93-113(2013)
- 71) 今西美由紀：訪問リハビリテーションにおける老年期のクライアントからセラピストへの祖父母性；(grandparenthood)の発現と生きることの質．作業療法，28(2)：157-166(2009)
- 72) 坂村八恵，梶谷みゆき：高齢者の存在と老いの自己受容 前期高齢者1事例へのインタビュー．広島国際大学看護学ジャーナル，4：79-86(2007)
- 73) 尾崎勝彦，恒藤暁：死に関する情報を含む映像が高齢者の情動変化に及ぼす影響 映像に対する関心の高さ、死別体験の影響．死の臨床，30(1)：84-88(2007)

- 74) 松本啓子, 若崎淳子: 中年における Successful Aging に関する現状 高齢者の場合. 日本看護学会論文集 看護総合, (37) : 460-462 (2006)
- 75) 沖中由美: 身体障害とともに老いを生きる施設入所高齢者の自己意識. 日本看護科学会誌, 26(4) : 19-29 (2006)
- 76) 杉原トヨ子: 終の生活場所選択における健康教育の必要性. 日本看護学会論文集 地域看護, (36) : 64-66 (2006)
- 77) 河合千恵子, 佐々木正宏: 配偶者の死への適応とサクセスフルエイジング 16年にわたる縦断研究からの検討. 心理学研究, 75(1) : 49-58 (2004)
- 78) 松井美帆, 森山美知子: 高齢者のアドバンス・ディレクティブへの賛同と関連要因. 病院管理, 41(2) : 137-145 (2004)
- 79) 秋坂真史: 南西諸島の百歳長寿者とその家族における人生終末期に関する意識構造. 家庭医療, 3(2) : 24-27 (1995)
- 80) ウラジーミル・ジャンケレヴィッチ (著) 中澤紀雄 (訳) : 死 . みすず書房 (1978)
- 81) 鈴木 忠, 飯牟礼悦子: 諦観と晩年性; 生涯発達心理学の新しい概念として. 白百合女子大学研究紀要, 44 : 101-127 (2008)
- 82) 広瀬信義: 人生は 80 歳から 年をとるほど幸福になれる「老年的超越」の世界、毎日新聞出版、56-63 (2015)
- 83) 富澤公子 (訳) タカハシ マサミ (訳) : 老年的超越—歳を重ねる幸福感の世界—、晃洋書房、38-81 (2017)
- 84) 高岡哲子、紺谷英司、深澤圭子: 高齢者の死生観に関する過去 10 年間の文献検討—死の準備教育確立に向けての試み—名寄市立大学紀要 2009 ; 3 : 49-58
- 85) 鈴木隆雄: 超高齢社会の基礎知識、講談社現代新書、188-189 (2012)
- 86) Francisco Mareno Lucas. Maria Isabel Rojas Marin (編集) : Human Development III, 76 (New Horizon). Cambridge Scholars Publishing; Unabridged 2017
- 87) Death Cafe in Wikipedia, USA.
- 88) 世界に吹き出したデスカフェ旋風: CHATTING AT THE DEATH CAFÉ、News Week 日本版. 24. 7. 2018
- 89) くらしナビ・ライフスタイル. 死の悲しみと向き合う. 毎日新聞. 2016. 08. 20 東京朝刊・家庭面 (2016)
- 90) Patrick, Randy: The PipestonFlyer, Millet. Alta. 28 Nov : A. 18 (2013)
- 91) Jules Morgan : Celebrating life in a Death Café, www.thelancet.com/neurology; September 2017 ; (16) : 690. (DanaInfo. media proquest より 2018. 10. 6 取得)
- 92) Jack Fong : The Death Cafe Movement: Exploring the Horizons of Mortality, Cham, Switzerland Palgrave Macmillan, 20017
- 93) L.N. トルストイ 米川正夫 (訳) : イワン・イリッチの死 (岩波文庫) 1973、岩波書店

- 94) E. キューブラー・ロス 鈴木晶（訳）：死、それは成長の最終段階（中公文庫）2001、中央公論社
- 95) アルフォンス・デーケン：新版 死とどう向き合うか, NHK 出版. 231 (2011)
- 96) アルフォンス・デーケン：生と死の教育 138-139、2001、岩波書店
- 97) 中岡成文：ハーバーマスーコミュニケーション行為、現代思想の冒険者たち(27)、講談社. 154-183(1996)
- 98) 中岡成文：増補ハーバーマス コミュニケーション的行為、筑摩書房. 297-299 (2018)
- 99) 児島功和：〈再著〉としての成長とそのコミュニケーション的な条件 - ナラティブ・セラピーを手がかりとして -、教育科学研究 (23) 11-19. (2008)